

# 法華久遠偈

本田義英

## 前言

正法華經が竺法護によつて中國語に譯出されて、既に十六世紀半餘、妙法蓮華經また鳩摩羅什の譯出以來十五世紀半に垂んとしている、わたくしは今ここで、それ以來行はれた法華經教學の多面的な解釋や、その多角的な思想的展開史などについて、云々しようとするのではない。

そもそも法華經出現の理由が、般若思想を母胎とし、緣起思想を根幹として、涅槃經や阿彌陀經や、諸餘の同系經典と同じく、佛教における宗教的本願の思想を根幹として、佛教の根本義である現象世界の在り方と、その現象世界に生まれ住むわれわれの、實際的な精神生活の指導原理を示すためのものであることは、今更ここに冗辯を要しないであらう。

かかる觀點からわたくしは、各宗各派の教權的解釋にとらわれず、廣意における印度學の立場から、素直に佛教そのものの在り方を考え、深く法華經そのものに直參して、學問的には別に専門とするのではないが、わたくし自らの懺悔と、その懺悔に基き發する發心修行の資糧たらしむべく、靜かに法華經の經意に沈潜してきたのである。

一度中國語譯された以後は、それに對する註釋論疏が、中國の文字を重要視し、隨つてその間に、中國文化的解釋が施されることも自然の勢であり、汗牛充棟もただならぬ古來の註釋論疏の各々が、それぞれ各宗各派において行われ、もとよりその何れにも蘭菊美を競う思想展開の華が咲いてはいるが、そもそも中國語に譯出した譯者それぞれは、皆その妙腕を揮つて、その當時における中國人を對象とし、その理解の程度を勘案して、これを成しとげたのである。しかし時代の降るにしたがつて、その譯經の理解すらが、それぞれの時代における中國文化を基礎とする結果、その解釋も漸次譯經そのものの原意からも、遠ざかつてゆくことも無理からぬところである。

そこで、われわれ現代日本人としても、また、かれら譯者と同じ立場に立つて、現代の日本人を對象とし、現代日本人の語感を勘案して、梵本から直接日本語に譯出することが、法華經の原意を素直に把握するために適切であることはいうまでもない、そしてそれによつて、始めて法華經そのものに直參し、法華經出現の目的にもそうことができるのである。

わたくしは、勿論、他のためというよりは、むしろ自らのために、その目的にそうべく、年來私かに法華經の日本語譯を志し、その業を續け、ほぼ完成の域に達したのである、もとよりすでに、日本語譯も詳略大小數種存在するのであるが、新資料の入手から、別に新たに校訂譯出するの必要にせまられたのである。

今般、畏友前田聽瑞、高畠寛我兩學兄らのために、その華甲壽記念論文集の出版が企てられ、まことに慶祝に堪えないところである、ところが、わたくしにも一文を寄稿せよとのことなので、兩學兄らの頌壽記念という芽出度き目的に隨喜し、ここに法華經中から特に久遠偈を選び、その梵漢和對照一文を捧げ、謹しみて兩學兄らの法壽久遠を祝福し、いささかわたくしの責を塞ぐことにしたのである、もとより「論文」と名づけ得られないことは、わ

たくし自ら認むるところである。

法華久遠偈というのは略稱であつて、詳しくは現行妙法蓮華經第十六、如來壽量品偈のことである。如來壽量品が、佛壽無量、常住不滅、久遠實成思想の母胎として尊重されきたつたことは、學者すべての認むるところである。佛壽無量においては阿彌陀經が想察され、常住不滅においては涅槃經との關係が考えられていることは、今更ここに説明を要しないであらう。

佛壽無量ということも、常住不滅ということも、久遠實成ということも、もとより中國語譯そのものにおいてもその意越は十分これを看取することができ、そこにわれわれ現實の生活に即する宗教的教誡も見出だされ、また古來の註譯論疏もことごとくみなこの點においてはその軌を逸してはいない、しかし、中國語譯や、それに對する註釋論疏のみによると、現代日本人の語感の上から、その佛壽無量も、常住不滅も、久遠實成の思想も、動もするとわれわれ現實の生活から遊離した眞實、眞理という論理の面に走り、その結果、宗教を離れた憍慢的理解に陥り、如何にすれば佛壽無量の世界を味得し、常住不滅の法界に參入し、久遠實成の恩海に游浴し得るかという、われわれ現實の生活における反省懺悔の教誡たる點、言いかえれば、法華經そのものが目的とする宗教的な面、即ち方便施設の本願的願業の面を、輕視するが如き誤解を招來する恐れなしとしないのである。

ところが、日本語譯においてこれを見ると、その語感の助けにもよるのであるが、中國語譯や、その註釋論疏よりうけた論理的な「眞實道」的感覚が、人間的な「方便道」的感覚によつて中和され、法華經の宗教的性格に、比較的容易に觸れられるように思はれるのである。

ここには單に、久遠偈の梵漢對照を表示し、拙譯を附し、梵文も中國語譯もそれぞれ、諸種異本を校訂してその

本文として用いたが、一々の校註はこれを省略した。

また拙譯漢字に附した振り假名は、わたくしの日本語における淺識から、原語の意味を十分にあらわし得ないものとなつた場合もあるが、できる限りその用語における原語の香りを留めたいと努めたつもりである。

しかしまだまだ、推敲の餘地もあり、註記も決して盡してゐるのではないが、投稿締切の期限に遅ること餘りに甚だしいので、この程度で筆を止めなければならぬことは、誠に慚愧に堪えない。請諒之。

本文

1. Acintiyā kalpasahasrakotyo yāsāṃ pramāṇān na kadāci vidyate |

prāptā mayā esa tad agra bodhidharmān ca decenyaṃ ahū nityakālam ||

(妙本)

(正本)

自我得佛來 所經諸劫數

不可思議 億百千劫

無量百千萬 億載阿僧祇

欲得限量 莫能知數

常說法

得佛已來 至尊大聖

常講說法 未曾休懈

不可思議そのむかし

量りて知らんすべもなき

千億の劫のそのかみの

久遠いにしえすでにこの最上さと覺(一)

開さと覺りてわれは絶えまなく

現象世界このよの實相みちを説き示し

今に倦むことなかりけり。(二)

2. Samādapemī bahubodhisattvān bāudhasmi jñānasmi śhapemī cāiva |

sattvāna koṭinayutānanekān pariṣācayāmi bahukalpakotyaḥ ||

教化 無數億衆生

勸助發起 無數菩薩

令入於佛道 爾來無量劫

皆建立之 於佛道慧

無數億劫 開導衆生

億千姦數 不可思議

而爲示現

あまたの菩薩ひとをみちびきて

佛敎ぶつこうの智界ちがいに住まわせつ

億那由陀かるゑんじゆの量りなき

衆生ひとを化おし熟じゆくえて無量いとながき億

劫波としふすでにうつろいぬ。

3. Nirvāṇabhūmiṃ cupadārṇayāmi vinayārtha sattvāna vadāmy upāyam |  
na cāpi nirvāṇy ahu tasmi kale ihāiva co dharmu prakāṇayāmi ||

爲度衆生故 方便現涅槃  
而實不滅度 常住此說法

立于滅度 以教化誼  
導利衆生 用權方便  
而現滅度 故爲衆人

演斯經典

衆生<sup>もろびと</sup>みちびくためなれば  
道理<sup>みち</sup>をはずさぬ方便<sup>てだて</sup>もて<sup>(三)</sup>  
涅槃<sup>すなはち</sup>地<sup>い</sup>して現<sup>いま</sup>せども  
ほとけゆめゆめ滅びざり  
つねに此世<sup>こゝ</sup>にて法を説く。

4. Tatāpi cātmanamadiṣṭhahāmi sarvaṅg ca sattvāna tathāiva cāham |  
viparītabuddhiṃ ca narā vimūḍhās tatraiva tiṣṭhantu na paṇyaṣū mām ||

我常住於此 以諸神通力  
令顛倒衆生 雖近而不見

吾已自立 一切黎庶  
分別群萌 於彼之誼  
其心顛倒 而不覺了  
欲立是等 佛宣暢說

凡そ衆生もろびと住るところ

いすこたりともつねづねに

そこに我身ぼとけは在あぜども

覺心こころまよ顛倒くらがりいて愚鈍ぐどんの

淵にしずめるもろびとは

そこに住いませる我身ぼとけをば

見るをえすしてさまよえり

5. Parimivṛtāni dīṣṭva mamātmabhāvanī dhātūsu pūjām vividhān karonti |

nān ca apacyanti janenti tiṣṭhān tato jukān citta prabhōti teṣām ||

衆見我滅度 廣供養舍利

咸皆懷戀慕 而生渴仰心

設見於佛 滅度之後

以若干物 而用供養

又覩吾沒 愁悵憂感

若復見佛 歡喜踊躍

我身ぼとけ滅しせりと見みいはて

種々に遺形ふたみを供養おがみいる

かれら我身ぼとけを不う見しいて

戀慕いとしさふかく生起つりいで

質直なみき心意こころぞ現あらわるる。

6. Riju yada te mridu mardavaḥ ca utstistakāyaḥ ca bhavanti sattvāḥ |  
tato ahaṁ cṛavakasenghain kṛitvā ātmāna darṣeṇy' ahu gridhrakṛite ||

衆生既信伏 質直意柔軟

假使質直 說至誠言

一心欲見佛 不自惜身命

衆生之類 朽棄身體

時我及衆僧 俱出靈鷲山

然後如來 合集衆音

能自示現 顯大佛道

もろびとかくて質直しとやふに

こころ質直なだしく柔軟なやみしく

ほとけ見んとて身命いのちをも(五)

惜しまぬときはその時に

我れ弟子たちともろともに

靈鷲わしのみやまのこの嶺に

我身ぼとけの身相すかた示現しめすなり。

7. Evaṁ ca haṁ teṣa vadāmi paṇḍit ihāva nāhaṁ tada āsi nirvṛitaḥ |  
upāyākāṅcālyā mameti bhikṣavaḥ punaḥ puno bhomy ahu jīvaloke ||

我時語衆生 常在此不滅 一而於後世 分別此語



以方便力故 現有滅不滅

吾在于斯 不爲滅度

比丘欲知 佛權方便

數々堪忍 現壽於世

そのとき直ぐにもろびとに

われは語りてさとすらく

我身は滅せずここにあり

比丘等聞けよ、われこそは

善巧方便のために生命界にて

時には輪廻してまた轉生る。

8. Anyehi sattvehi puraskrito' hain teṣān prakāṣmi mamāgrabodhim |

yūyañ ca gābdain na cīnotha mahyañ anyatra so nirvṛitu lokanāhaḥ ||

餘國有衆生 恭敬信樂者

及與異人 眷屬圍繞

我復於彼中 爲說無上法

因而宣揚 於尊佛道

汝等不聞此 但謂我滅度

諸賢得聞 佛出世間

又復導師 餘國滅度

餘のもしもとたりとても

もしも恭敬をささげなば

そのひとたちにわが最上覺

説きあかしてぞしめすなり

されどなんだち世主を

滅したまえりと一とすじに

おもいまよいてさめやらで

我身の聲言聞きもせじ。

9. Paṅgamy ahaṁ satva viḥanyamānāṁ na cāhu dārceni tadātmabhāvam |

spihentu tāvaṁ mama dārcasya trīṣṭāna saddharṇu prakāśyisye ||

我見諸衆生 沒在於苦海

故不爲現身 令其生渴仰

因其心戀慕 乃出爲說法

觀察衆生 愁憂懊惱

倉卒不現 其身相好

望想飢虛 欲得見佛

然後乃爲 分別經典

衆生みるにかれらみな

苦惱の淵にしみおる

さればことさら我身の

身相をそこにあらわさず

我身の端姿戀ふ慕ふ

渴仰<sup>いど</sup>し<sup>い</sup>ころに<sup>い</sup>かるとき  
現有<sup>このよの</sup>實相<sup>みぢ</sup>をしめさなん。

10. Sadādhīṣṭhānaṁ mama etadīdriṣaṁ acintyā kalpasahasrakotiyaḥ |

na ca cyavanī<sup>1</sup> itu gridhrakūtāt anyāsu çayāsana<sup>2</sup> kotibhiḥ ca ||

神通力如是 於阿僧祇劫  
常在靈鷲山 及餘諸住處

不可思議 億百千劫  
吾常建立 如此像誼  
佛來至於 靈鷲之山  
自然牀座 無量姦數

我身<sup>ぼんげ</sup>の神通力<sup>ちんぷり</sup>かくのこと

思議<sup>かそ</sup>えんすべもさらになき

千億劫<sup>いともひさ</sup>しきそのあいだ

靈鷲<sup>わし</sup>のみやまはいうもさら

なおその餘<sup>ほか</sup>の億數<sup>もつちう</sup>の

住處<sup>とこ</sup>に住みて死にはせず。

11. Yadvai sattu<sup>3</sup> ima lokadhātūn paçyanti kalpeni ca dāya<sup>4</sup> mānaṁ |

tadāpi cedan<sup>5</sup> mama buddha<sup>6</sup> kṣetraṁ paripūrṇa<sup>7</sup> bhoti maru<sup>8</sup> mānuṣāṇāṁ ||

衆生見劫盡 大火所燒時 一設使衆生 見是世界

我此土安穩 天人常充滿

大火災變 劫燒天地

當斯之時 吾此佛土

具足微妙 柔軟安雅

衆生たといこの世界をば

劫波盡きていたましく

燒けはてなんと見うとも

我佛國は安穩らけく

天と人にとに充ちみてり。

12. Kṛīḍā rati tesa vicitra bhoṭi udyanaprasādayimānakotyaḥ +

pratiṃḍitaḥ ramayāṅ ca parvatāḥ drumāis tathā puṣpapaḥāṅ upetaḥ ||

園林諸堂閣 種種寶莊嚴

歌舞戲笑 無量安穩

寶樹多華果 衆生所遊樂

講堂精舍 樓閣室宅

校飭莊嚴 皆以七寶

藥草樹木 華實茂好

色とりどりの戲樂しさに

ひとは樂しみ遊ぶなり

園林も宮殿も堂閣も

その數しれず億數あり

寶成の山に莊嚴られて

樹々に華咲き果實具る。

13. Uparin ca devā 'bhihananti tūryān mandāravaraṣaṁ ca visarjayanti |

mamāya abhyokiri cṛāvakaṁ ca ye cānya bodhāvīha prasthitā viduḥ ||

諸天擎天鼓 常作衆伎樂

自然雨華 心華衆色

雨曼陀羅華 散佛及大衆

以散於佛 及弟子上

諸人皆坐 館室雷震

或復好樂 發道意者

上空に諸天樂器擊ち

曼陀羅華をば雨降らし

我身と弟子となお餘の

菩提求むる諸賢者に

うやまいちらしちちなり。

14. Evain ca me kṣetram idam sadā sthitam anye ca kalpentīma dāhyamānam |

subhāravain paçyīṣu lokadhātūn upadrutain çokaçatābhikṛṇam ||

我淨土不毀 而衆見燒盡 一 吾之國土 建立常然

憂怖諸苦惱 如是悉充滿

餘人有見 劫如燒盡

觀其世界 火甚可畏

本以權便 示現斯變

かくわが國土は常住なれど

餘のもろびところなく

燒けて劫つると計度らいて

この世界はいともおそろしと

觀いまよいてうちしずみ

重きおそれにおそわれて

百數の憂苦に充ちみてり。

15. Na cāpi me nāma cīṇonti jātu tathāgatānāṃ bahukalpakotiḥhiṃ |

dharmasya vā mahya gaṇasya cāpi pāpasya karmasya phalevarūpam ||

是諸罪衆生 以惡業因緣 如來咨嗟 無央數億

過阿僧祇劫 不聞三寶名 佛之法尊 其爲若茲

衆生品類 不肯聽聞

然而煮造 殃疊之罪

あわれかれらは無量億

劫波をふるとも如來我身と

正法、大衆の名をだにも

聞きたてまつるよしもなし

ああ、これ罪業の報いなれ。

16. Yādā tu sattvā mīṛḍu mādāvāḥ ca utpanna bhontīha manusyaloke |

utpannamātrāḥ ca gubhena karmāṇā paçyanti mān dharmu prakāçayantam ||

諸有修功德 柔和質直者 假使人民 柔軟中和

則皆見我身 在此而說法 其時佛興 出于人間

已見世尊 經法所詔

則爲顯揚 清淨誼理

さあれ、善き業積みかさね

人の世ここに生まれきて

ころはいとも柔和しく

質直しき性ちのひとびとは

生まれきたるやすぐさまに

ここに法説く我身を

見たてまつりて仰ぐらん。

17. Na cāhu bhāṣāmi kadāci teṣāṃ imāṃ kriyāṃ idricikṃ anantāṃ |  
teno abhī dīṣṭa ciraśya bhomi tato pi bhāṣāmi sudurlabhā jinaḥ ||

或時爲此衆 說佛壽無量  
久乃見佛者 爲說佛難值

佛未爲人 分別誠誨  
說斯所造 往返之事  
假使如來 久久而現  
然後乃爲 講是經典

されど我身はもろびとに  
邊てしもあらぬこの願業

ゆめ説くことはなかりけり (七)

されば我身は語り告ぐ

としつきながく我身に

まみえていつるひとびとは

勝者のこころ覺得りえじと。

18. Eṣṭāṇaṃ jñānabalaṃ mamedaiṃ prabhāsaraiṃ yasya na kaṇṇidantaḥ |

āyug ca me dirgham anantakalpaiṃ samupājitaiṃ pūva caritva caryāṃ ||

我智力如是 慧光照無量  
壽命無數劫 久修業所得

吾智慧力 聖達光明  
如是所見 不爲薄少



前世所行 無量劫數

慈心之品 平坦無求

我身ほとけの智力ちゐはかくのごと

光明ひかり燦々かがやき邊はてしなく

壽命いのちもまこと長遠とこ無量しえ劫えに

久遠のむかし行みちを修し

得たるところのちからなり。

19. Mā sañcayam atra kurudva paṇḍitā vicikitsitām ca jahathā aḥeṣam |

bhūtaṁ prabhāṣāmy aham eta vācām mīṣā mama nāiva kadāci vāg bhavet ||

汝等有智者 勿於此生疑

當斷令永盡 佛語實不虛

智慧明者 無得狐疑

棄捐猶豫 勿懷結滯

所當列露 未曾班宣

佛今散語 無復餘誼

諸智みなとも者此理こに疑いひの

ところをお作こ爲すことなかれ

惑ずいを無餘すべて斷てよかし

我身ほとけの語言みことば眞實まことなり

虚妄語いつわることはさらになし。

20. Yathā hi so vāidyā upāyaçikṣito viparītasamjñīna sūtāna hetoḥ |

jīvanamāmāna mīrheī brūyāt tañ vāidyu vijño na mīṣeṇa codayet ||

如醫善方便 爲治狂子故

如醫所建 善權方便

實在而言死 無能說虚妄

開闡分別 示子方術

現衰老死 其身續存

神變音聲 不終不始

もしも方便すべし醫師ありて

顛倒くろえ想る子らを救わんと

生存けるその身をまのあたり

死せる身體すがたにしめすとも

知識あるひとは誰れとても

それなる醫師を虚妄うそ語者と

せめ説くものはよもあらじ。

21. Emeva hain lokapitā svayambhūḥ cikitsakāḥ sarvaprajāna nāthāḥ |

viparītamūḍhaç ca viditva bālān anivṛito nirvṛita darçayāmi ||

我亦爲世父 救諸苦患者 一受諸等友 而自由用

爲凡夫顛倒 實在而言滅

世吼療治 衆生之病

開導癡騃 令離愚冥

而現泥洹 亦不滅度

無始<sup>ふる</sup>き久遠のむかしより<sup>(八)</sup>

我身<sup>ぼとけ</sup>またこれ世間の父

一切生類<sup>ひつと</sup>の醫師なり王主<sup>おうじ</sup>なり

こころ顛倒<sup>くゑん</sup>想<sup>えん</sup>る凡夫<sup>ぼんぷ</sup>等を

愚痴<sup>はかな</sup>きものと知ればこそ

實<sup>じ</sup>は滅<sup>めつ</sup>するにあらざれど

しかも滅<sup>めつ</sup>すると説きしめす。

22. kin-kāraṇaṃ mahyamabhiḥkṣadargaṇat vi-craddha bhonti abudhā ajānakāḥ ||

vi-cvasta kāmesu pramatta bhonti pramādaheṭoḥ prapātanti durgatiṃ ||

以常見我故 而生憍恣心 欲得現已

放逸著五欲 墮於惡道中 人常闇弊 使意信樂

以放逸故 墜墮三處

その所以<sup>ゆゑ</sup>いかにとしめさんか

もしも我身<sup>ぼとけ</sup>が永久<sup>とこ</sup>常住<sup>ちやうわ</sup>に

生存ける身相を現せんには

覺なき愚かのもろびとは

まことの信心うしないて

諸欲に執着れて狂亂いはて

懈怠ごころに原因ずられ

惡趣の底に墮ちゆかん。

23. Cari acari jāniya nityakālān vadāmi satvāna tathā tathāham |

kathān nu bodhāvupanāmayeyān katha buddhadharmāna bhaveyu lābhinaḥ ||

我常知衆生 行道不行道

隨應所可度 爲說種種法

每自作是念 以何令衆生

得入無上道 速成就佛身

其心踊躍 欲令覺了

如來所詔 常以知時

爲其衆生 而行智慧

以何方便 而受道法

何因令獲 於佛經教

さればあらゆるひとびとの

經て來し行道のよしあしを

知りて我身はたえまなく

ひとそれぞれの機に應い

ほとけのおしえ説きしめす

「ああ、そも如何にみちびいて

ひとを菩提に導入らしめん

ああ、そも如何にみちびかば

ひとは佛法に得悟らんか」と

ひるはひねもすよもすがら

たえずほとけは悲願うなり<sup>〇(十)</sup>

### 註

(一) agrabodhidharma (最上覺の法)とは、最上覺によりて得られたる現象世界の實相を意味し、現象世界の實相に即する最上覺と解釋することは、壽量品の教理的基調がある方便品等に於ける論理が、これを肯定する。

(二) 文意の上から、正本の「未曾休懈」句の適切なるにかんがみ、試みに加譯した。

(三) ここの「方便」は、「眞實即方便、方便即眞實」の所謂體内方便であつて、第二十偈に於ける方便學者 (upāyaḥkṣita) としての佛の方便であるから、かように試譯した。

(四) この久遠偈は、佛言であるから、「我」なる語を「ほとけ」と訓ずることにした。

(五) 梵本には「身命」とはなく、「愛欲」(kāma)となつてゐるが、妙正兩本、西藏譯本には共に「身命」語となつてゐるのび、kāma は kāya の誤傳であると思、藏漢諸譯に準じた。

(六) Saddharma は妙本に於ては「法」、正本に於ては「經典」と譯出されてゐるが、その語義から考へても、また妙本の譯語例から考證しても、その意味するところは「現有實相」なのである。

(b) 前半偈を妙本に於ては、「或時爲此衆 說佛壽無量」と譯出され、梵文とは一致してゐない、正本に於ては、宋元明三本等によれば、「佛未爲人云々」とあつて大體梵文とは一致する。西藏譯本もまた然りである。然らば妙本の原典はこの點全然異本であつたのか如何か。

思ふに妙本に於ける右の譯文は、後半偈の「久乃見佛者 爲說佛難值」という佛の願業的教誡を理解しやすからしめんがために、施設せられたのではないかと思う、前第十六偈に於て、「柔和質直者 則皆見我身 在此而說法」と說かれており、今この偈では反對に、「久乃見佛者 爲說佛難值」と說かれるのである。「在此而說法」の對象は、「柔和質直者」であるが、若し反對に、柔和質直ならざるものに於ては、「在此而說法」的な佛の常住的存在は、彼らにはむしろ輕信的な感情を植えつけ、常住性に馴れ、「難值」の渴仰を失ひ、佛常住に對する安易な感情から、苦海沈没の憂惱を見ることが、既に第九偈にも說かれ、また第二十二偈にもうたわれているのである。もとより「在此而說法」が、佛壽無量久遠常住の佛の本意であるから、その意をうけて、「或時爲此衆 說佛壽無量」句が用いられるのも、自然の文調であるが、しかも佛壽無量ということに馴れて、これを輕信する「久乃見佛者」の輩には、「爲說佛難值」と誡しめて、佛の慈悲願業(kṛiyā)を理解せしめんとすることも、この前後の文意に於て必ずしも不自然とはいへない。佛の本願的願業そのものはもとより言語を以てこれを表現することはできないのであるから、梵文の構成またこのままでよいのである。妙本の譯文は、その梵文の否定的表現を、肯定的な面から考えて、「在此而說法」的佛壽無量が佛の本意ではあるが、輕信の輩には、實質的には却つて「佛難值」の結果を招かしめるといふ、佛の悲願に滿てる惱みを、含蓄的に表現してこの譯文を構成し、結局、佛の願業は言語を超え、「はてしもあらぬ」ものであることを示さんとしたものであると考えられ、これが妙本に於ける譯文の由來するところで、これ次偈の、「我智力如是 慧光照無量 壽命無數劫 久修業所得」とも、論理的なつながりを有せしめるところであり、この點妙本の原典は、別に異本であつたと見る必要もなく、かかる點に於ても、譯者羅什の妙腕をうかがうことができると思う。

(ウ) Srayambhū は「自在者」のこと、<sup>①</sup>「無始の存在者」、「かかわるところなきもの」などを意味する、ここでは、「世間の父」、「醫師」、「王主」等と同格に用いられ、佛の性格を説いているのであるから、「かかわるところさになく」とも譯出されるのであるが、今は假りにかように試譯してみたのである。

(ハ) 尼波羅梵本には、Carim Carim とあるが、妙本の「行道不行道」と一致する西域梵本の Cari acari とあるによつた。

① 最後の二句は梵本にはないが、前後の意味上、妙本に於ける「毎自作是念」の句が、極めて自然の意を表わしているので、それに準じ假りにかように加譯したに過ぎない。(一九五一、七、一九、病中稿)(前京都大學文學部長文學博士)

